

D-5 明治前期までの我國の乳児期栄養法の変遷に関する一考察  
日本女大家政 加藤 翠

才二次大戦後の我國の乳児期栄養法——乳汁栄養と離乳期栄養——の改良進歩のめざましさは、それ以前のいずれの時期に比べて、まことにめざましいものがあり、現在では乳児期の栄養障害による死亡は激減し、その方法は簡便になり、育児上苦勞な事でも恐ろしいものでもなくなつたかの感がある。ここに到る我國の乳児期栄養法の変遷の過程は、近代小児医学が我國に取入れられるようになってからについては、資料も多く残されまゝとめられたものもけられるが、それ以前の変遷の過程については、ほとんどこれにふれたものをやることができない。

私は近代小児医学が我國に取入れられた時期として一応、弘田博士がドイツ留学より帰朝東京大学に小児科創設の明治22年頃として、その頃までの我國の育児書・医書その他について、我國の乳児期栄養法がどのように指導され行なわれて来たかの變遷を調査してみたので、これにつき報告する。

いうまでもなくその頃までの我國の乳汁栄養は母乳が中心ではあつたが、従来人工栄養に牛乳使用がされはじめたと考えられていた時期、ガラス製の乳瓶が取入れられたとされていた時期などについて、再考を尋ねべき史実などを得たのでこれについても論及したいと考へている。